佳作

パッセージに思いを寄せて

福岡教育大学附属福岡中学校　二年
梅野　琴葉

八月三日、北九州ウェル戸畑中ホール。私は今、ピアノコンクール会場にいる。出番はラストの28番。舞台そでで、練習のときの録音をイヤホンで聴き、楽譜を開いて、ひたすら指を動かす。

開始から約一時間後。27番の演奏が終わった。会場からは大きな拍手。私の緊張感が増す。リストの超絶技巧練習曲と、ショパンのノクターンを難なく弾きあげた27番は、静かに舞台から戻ってきた。なおさら身が引き締まる。

私は舞台の入り口に立ち、ハンカチを握りしめて、大きく深呼吸をした。アナウンスを待つ。六月二十四日、七月十五日、そして七月二十八日と落選続きの今年。ここまできたら開き直るしかない。悔いのない演奏をする。ただそれだけだ。結果にとらわれてはいけない。そう思って――極力思うようにして、この五日間ピアノに励んだ。あとは集中して弾くだけ。「大丈夫、大丈夫」と自分に言い聞かせたとき、アナウンスが流れた。

「28番、どうぞ。」

扉が開いた。わたしはライトで輝くピアノに向かって進んでいった。いよいよ、今年の夏の最後になるかもしれない闘いが始まる。

一礼をし、ピアノのほうへ向かう。ピアノはカワイ。家のものと同じだ。イスの高さを調節する。眼鏡をかける。イスとピアノの距離を調整する。鍵盤をハンカチで拭く。一つ一つの過程の中で、心を落ち着かせていく。ポジションは完璧。あとは目を閉じて集中力を高めるだけ。大きく息を吐く。〝いける〟と確信したとき初めの定位置に指を置く。小さく息を吸って一音弾いた。私の

六分半が始まる。

強弱、テンポ、ペダリング…。一つ一つ意識し、そして心で歌う。たまに目線を上げ、きれいな音色で響いているか、確認する。楽しく、伸びやかに全身で表現する。コンクールだということはどこかにとんで、まるでリサイタルで弾いているような境地に。最初のパッセージが決まった。緊張しないで弾けている‼中間部、少しテンポを落としてゆったりと伸びやかに。ソプラノの音を遠くまで響かせる。右手の和音をたっぷり響かせながら、左手のトリルは弱い音で、速く指を動かす。ピアニッシモで弱く弾くが、それでもソプラノを響かせる。場面が変わって、快活な印象に。一気にクレシェンドして重々しい音色に変える。左手アルペジオは転ばないように、右手指は鍵盤上で左から右へと大きく移動。音を外さないよう、かつ、流れにのって。難関の両手のアルペジオ。その後はデクレシェンドで右手だけで半音階ずつ駆け上がり、また主題に戻る。いよいよクライマックス。最後の一分間は、ミスをしてはいけないが、曲の中で、一番情熱的に勢いよく弾く。力強いアルペジオの三連続。魅せ場の和音連打は、両手ともしっかりつかむ。テンポが速くなりすぎないように、音が抜け落ちないように、転ばないように、丁寧に音を刻んでいく。盛り上がるけれど落ち着いて。最後の三音、二音、そして一音。上を見上げてめいいっぱいに音を響かせた。――終わった。この夏、最後になるかもしれない瞬間だ。この感じ、この空気感を心と体に刻んでおこう。

イスからゆっくり立ち上がり、聴いて下さった方々、審査員の先生方に向かって深く一礼をした。「あぁ、もう悔いはない。やりきった。出し切った。」気持ちよく存分に弾けたと心から思った。演奏終了後、会場で待つ家族に会うと、私の今夏の苦しい闘いを支え、応援し続けてくれた母は泣いていた。しきりに「良かった、良かった、よくやったよ。」と感無量な感じでほめたたえてくれた。四十分後にホールで合格者の発表がある。「今自分のできる精一杯」を発揮できたから、落ちたとしても悔いはない――結果を待つだけだ。結果発表までの待

ち時間、この夏味わった色々な苦い思いがよみがえってきた。

今夏の闘いは六月二十四日から始まった。ピティナピアノコンペティション――全国規模のコンクールだ。初めてコンクールに挑んだ小学六年生の時から、今年で三回目の挑戦になるが、予選通過さえしたことが無い。今年こそは！と希望を持って臨んだが、またも一回目の予選会場では、予選落ち。「またか…」と少ししょげたくなるが、二会場受ける中の一会場が落ちただけの事だ。落ち込んでいる暇はない。すぐに気持ちを切り替え、次の会場での予選通過に望みをかけて、練習に励んだ。

講評に書かれたことを出来る限り直そう。次こそは受かりたい。学校から急いで帰り、練習時間を一分でも多く確保する。

そして迎えた七月十五日――二会場目、予選当日。自信を持って、前回よりも、さらに伸びやかに弾く。前回の予選で指摘されていた、和声の響きを感じながら、鍵盤をしっかりつかんで、力強く弾く。音をきれいに響かせて…。たいしたミスもなく弾けた。「今度こそはいけるかも!!」――少し期待が持てる。演奏終了後、結果発表までの時間を落ち着かない気持ちで過ごし、予選通過者掲示の瞬間を待つ。貼り出されると同時に、掲示板を取り囲んでいる人混みをかきわけて、自分の名前を探す。――「あれ？無いやん。」何回見直しても、私の名前は掲示されていなかった。しかも、通過ラインは例年よりはるかに高い、8.34点。「ミスしてないんだけど…。」「この前書かれたこと守ったよね？」どこが足りなかったのだろうと、講評に目を通す。点数は前回より伸びていたが、通過ラインに、あと0.1点足りない。講評の内容は、以前書かれたことの逆のことを指摘されている箇所もある。腑に落ちない。「直さなければよかったの？」「何で奏法を統一してくれないの？」「今までの練習は何だったの？」何だか、自分の努力が報われず、自分の演奏の全てを否定されているような気持ちになる。悔しい――。

――何がダメなのだろうか――。コンクールデビューが遅いから？場数を踏んでいないという経験不足から？

――いずれにせよ、実力が足りないという現実を突きつけられる。ピティナに挑み始めて三年目、今年も厳しい結果から始まった。幼児から小学生時代に基礎固めをして、一年一年積み重ねて上達してきたであろうライバル達。対して出場三年目を迎えたばかりの私との間に立ちはだかる壁は大きい。目には見えない大きな格差というものを感じる瞬間だ。みんな、しっかりとした土台の上に、しっかりとした骨組みができあがっている。私は、未だ、土壌すらできあがっていないのか…。でも、ここでくさっている暇はない。私には、まだ、もう一つのコンクールが待っているのだ。

九州・山口ジュニアピアノコンクール。私が毎年、何とか予選通過し、本選に臨むことができる唯一のコンクールだ。今年もこれにかけよう！気持ちを奮い立たせて、翌日から又、練習に更に励んだ。

曲目は、サン＝サーンスの「アレグロ・アパッショナート」――13ページの大曲だ。人より基礎力の足りない私には、上手く弾きこなすのが難しい情熱的な曲だ。絶対に弾きこなして本選まで残るんだ。意気込みだけは人に負けない。強い意志を持ち、夏休みに入ってからの二週間、一日置きに特別レッスンに通い、家でも猛練習した。人の三倍、四倍しても追いつかない。人より、七年も八年も遅れているのだ。何とか追いつきたい。努力が足りないと言いきかせる。――王貞治さんの言葉――「努力は必ず報われる。報われないとすれば、それは、まだ努力とは言えない。」この言葉を胸に刻み、ひたすら、何度も何度も鍵盤の上で指を動かし続ける毎日だった。

「この曲を弾きこなすのは難しいのよね…。」と、あまり薦めていなかった先生も目を追うごとに「いけるかもしれない！」と、言ってくれるようになっていた。難しい曲だけれど、正確に弾ければ高い評価をもらえるはず――。私は、予選通過したい一心で福岡予選に備えた。

迎えた七月二十八日予選当日――受付を終え、プログラムを見ると、私と同じ曲を弾く人が五人もいた。しかも私の次の番号の人も同じ曲。少し運が悪い気もするが、「いつも通り弾けば大丈夫。」とすぐに気を取り直す。

出番が来て、席につき、いつものように気持ちをコントロールして入ったものの、出だし直後のパッセージの最後の音を外した。はじいて出す音だったから、余計に大きく響いてしまった気がした。が、崩れるわけにはいかない。すぐに気持ちを立て直し、次から次にやってくるフレーズに追われながら、集中力をより高めていく。何とかその後は大きなミスもなく最後まで弾き終えることができた。出だしのミスに不安は残るものの、次の同曲の20番もミスがゼロというわけではなかったので、自分と大差は感じられず、「何とか通るんじゃないか…」という望みをかけた。

結果発表――。19番、又も、私の番号はない。〝20〟という数字が目にとびこんできた。今回は、ひどく落胆を覚える。同じ曲を弾いた五人中、通過したのは20番ただ一人だけ。私は落ちて、直後に弾いた20番が通過。大差はないと感じたのに――。持ってはいけない感情が湧き出てくる。「私と20番のどこに、何の差があったの?」と、不信感を抑えることができず、結果を素直に受け入れることができない。

コンクールに出場し始めた小六の時から、毎年受けて一度も予選落ちしたことが無いこのコンクール。ピティナが落ちるから、余計にこのコンクールへの思い入れは強く、予選通過にかけてきた。今年も、今日の福岡予選で本選出場権を得たかった。なのに、まさかの落選。私の直後に同じ曲を弾いた人が受かるという屈辱。その人と比べ、どこが劣っていたのかが分からず、途方に暮れる。五日後には、北九州予選が控えているものの、もはや通過できる自信はかけらも無くなっていた。

「あと五日で何ができる?」「今日だって大きなミスはしてないのに受からないんだから、もう無理。」練習を続けなければ悔いが残ると頭で分かっていても、「この二週間、こんなに練習しても受からないのだから、次に何の練習をすればよいのか分からない」と諦める心が前に出てくる。気持ちを切り替えることができない。母も私の気持ちを察して何とか頑張らせようと励ましてくれる。このままではいけない、こんな心ではいけないと思

いつつも、「最後まで、後悔しないように、最後まで…」という母の言葉をよそに、私の心は目覚めてくれない。立ち直れない。やる気が起こらない。そんな私の姿を見て、父が言葉をくれた。「これくらいの逆境で頑張らないのは負けだよ。」ハッとした。――負けたくない。私は負けるのは好きじゃない。ましてや自分の弱い心に負けるのは最悪だ。だったら、ここで頑張らないわけにはいかない。心のスイッチがオンになった瞬間だった。

次の予選で受かる自信などみじんもない。むしろ心は折れて、崖っぷちだ。だからこそ開き直ろう。「結果を意識せず、悔いの残らない演奏をするためだけの練習に変えよう」――そう母と決めた。そこからの五日間、後悔しないためだけに、今の自分に出来る全てをやった。一日のうちのほとんどをピアノの部屋で過ごす。同じ姿勢を続けているせいか、首から腰までがバキバキになる。ストレッチや母のマッサージでしのぎ、練習を繰り返す。負けない――同じところを何度も何度も弾き続ける。一ページ、一ページもう一度さらい直す。楽譜に忠実に、そして強弱をつけて、抑揚をつけて、一フレーズ、一フレーズしっかり表現するよう心がける。今の精一杯を出し切る、ただそれだけにこだわり、ラストスパートともいえる自分との闘いの五日間だった。その闘い、今日で一段落するのかな…。

――演奏終了四十分後。いよいよホール集合。九州・山口ジュニアピアノコンクール北九州予選、通過者発表の時が来た。

敢えて眼鏡はかけなかった。見るのが怖いからだ。貼り出された瞬間、会場が少しざわつく。予選通過者の演奏番号が、番号順に並んでいる。〝27〟がかろうじて見えた。――そしてその右にもう一つの数が出ている。――〝28〟私の番号だ。受かった。やっと受かった。やっと――。言葉に表せないほど、この三年間の中で一番嬉しかった。ただただ、嬉しい。賞状の入った封筒を受け取り、少し中をのぞくと、『優秀賞』の文字が大きく見えた。会場を振り返ると、母がまた泣いていた。

「よかったね、よかったね!!」

もう一度言ってくれた。さっきとは違う「よかったね。」

――やっとの思いで、諦めそうになる弱い心と闘って、結果が欲しくなりそうなもろい心を打ち捨てて、手にできた本選への切符。今回ほどこの本選への出場権の重みを感じたことはない。本選へ向けて練習を続けられる喜び。ピアノを弾く喜び。――私がこの夏、この苦しいコンクールでの闘いで得たものは何だろう…。私にとって、ピアノを弾くこととはどういうことだろう…。

私が思うに、演奏者というのは、〝音を紡ぐ職人〟のようなものだ。作曲家がこの曲にどんな思いを込めたのか、自分が曲からどんな感情を抱いたか、その曲を解釈してそこから得たイメージを伝えるように音を奏でる。個性を輝かせるべく一音にこだわってこそ、真の表現者となれる気がする。同じ曲でも演奏者によって、表現は十人十色。一音一音、自分の指で丁寧に紡ぎあげていくその過程の中で、各々が違う音色を奏で、個性溢れるものに仕立てていく。

本選は八月二十三日――。きっと当日は予選を通過してきたライバル達が、鍵盤に思いの丈をぶつけるに違いない。渾身の思いを込めて、テクニックを披露し、音色を響かせて、鍵盤上では、美しい火花の散らし合いが繰り広げられるだろう。私は、その日までに、どこまで、自分の表現を磨き、高めることができるだろうか。賞という結果にとらわれずに練習していくことの大切さを学んだからには、もっともっと一音一音、丁寧に音を刻める弾き手になりたい。

グランドピアノがほとんどを占めるひっそりとした部屋の中で、外のセミの声がかすかに聞こえてくる……。もう一度パッセージのやり直し。気を取り直して頭からもう一度。一音一音、自分の音を鍵盤の上で紡いでいく。苦手とされる表現力に幅を出すために、今日も私はピアノに向かう。一音に、一パッセージに思いを込めて…。